

長野県知的障がい福祉協会会長 宮下 智 (明星学園)

【行動とその意味するもの～PDCA サイクル①～】

彼女は、たびたび所在不明になる。30分も見つけれないでいると、近隣のコンビニから連絡が入る。「今日は、コーラとアイスとチョコレートを食べてしまいましたよ。明星の方ですよ。困るんですよ。」と。

彼女のコンビニ行きは、単純に「食べたい」「飲みたい」だけが原因ではない。なぜなら彼女には、10時には、オプションのおやつがあり、15時には事業所提供のおやつ以外に2つの飲み物と2つの食べ物から各一つずつを選択することができるマイおやつがあるからだ。しかし、記録を確認すると、昼食前の時間帯、夕食前の時間帯に所在不明になることが多いことが確認できた。

実は2～3語文域の彼女だが、まことに自己選択に関しては、なかなか本音が表現できない苦しさを抱え続けている方なのだ。園長先生に職員会に出て欲しい時に「園長先生！職員会に出ませんね！」と大声で叫び続けたり、年度末、異動して欲しくない職員に「〇〇さん、結婚しますね」と叫び続けたりと…。

したがって、彼女の自己決定の正しさを確認する上で頼りになるのは、行動変容のみなのである。そこで、行動の背景にある原因を推定し、支援方法を決定する(PLAN)→支援を提供する(DO)→コンビニに行くか、行かないかを観察する(CHECK)→行けば支援方法の練り直し、行かなければ次の課題場面の支援方法の研究へ(ACTION)である。

まずは、昼食前の所在不明、昼食前ということになる。①おやつは食べているか？→食べている②おいしそうに食べているか？→食べている③内容は何か？→おせんべい、ここで疑問が生じる。コンビニではチョコレートを食べている人が、おやつでせんべいを選択するか？→本人に相談する→チョコレートとひと言…。→10時のおやつをチョコレート系に変更する→この時間帯の所在不明が無くなる。彼女のニーズは、チョコレートを食べた

いであり、その心の奥には「こんなこと言って良いのかな？」が隠れていた。

というわけで、次は夕食前の所在不明の支援に着手。手法は、午前中と同じ。①マイおやつは食べているか？→食べている②おいしそうに食べているか？→食べている③内容は何か？サイダーとアイスに源氏パイ、源氏パイは必ず選択することのこと？ここで疑問が生じる。コンビニでアイスを食べている人が、固い源氏パイを必ず選択する？何かがおかしい…、そこで相談。→コーラとサイダーから一品、雪見だいふくとソフトクリームから一品の選択とする→この時間帯の所在不明が無くなる。

彼女の核心のニーズは、やっぱりアイスクリーム大好き、でも「こんなこと言って良いのかな？」だったんだろう。

さて、こんな支援が進みつつある中、今度は昼食後や夕食後の所在不明が目につくようになる。もともと、偏食が強い彼女であるので、昼食に食べたもの、残したもの、夕食に食べたもの、残したもののチェックに着手する。

サバの南蛮漬けを残したその後、所在不明になった…、麦ごはん、味噌汁、筑前煮を残したその後、所在不明になった…、そこで支援方法は2つ、一つ目は残すものが多い時には、その代わりにメニューの提供(相談の結果、鶏のから揚げとなる)、2つ目が残すことへの罪悪感を少なくする心のケア(残してもいいんだよ、嫌いなものがあるのが普通だよ、大人になって嫌いなものを一生懸命食べることができるようになりたいと努力している人はいないよ)、これで食後の所在不明は無くなった。

この間、およそ1ヶ月。繰り返されたPDCAサイクルが、所在不明にならないかの行動だけを頼りに、(もちろん彼女は、それ以外の行動でも多くのヒントを私たちに与えてくれているのだが)彼女の核心のニーズをとらえるだけのために繰り返される。

決して諦めない、短期のスパンで繰り返さるPDCAサイクルこそが、彼らの豊かな暮らしを保障する。